いずれEUを悩ます「火種」に

ウクライナ「過激民族主義」の危うさ

ロシアの侵攻開始から半年を経ても、ウクライナは激しい抵抗をやめず、一部では反攻にさえ乗り出す。その士気を支えるのは、ロシアの暴挙の前に高まるナショナリズムだ。欧米諸国も強力な武器・経済支援を続け、国家の威信をかけた戦いを後押しする。だが、この国に広がる愛国心には過激主義の影もちらつく。それは、将来、ウクライナを欧州連合(EU)に迎え入れようとする欧州にとって、深刻な災いの種となりかねない。

「ウクライナと共に」「ウクライナのように勇敢になれ」――。ウクライナでは今、国内の至る所でそんな看板やポスターを目にする。青と黄の国旗のほか、戦場で銃を構える兵士の写真やイラストも掲げられ、戦時下における愛国心の高揚が街を包む。「ロシアの戦艦、くたばれ」などとロシアへの憎悪をむきだしにするメッセージも多い。人々の声を拾えば、「欧米はもっと武器を支援してくれ。私たちは戦う」と勇ましい。

ウクライナとロシアは共に九世紀ごろに建国されたキエフ・ルーシ(キエフ公国)をルーツとし、互いにその後継を主張する。ただ、ウクライナはロシア帝国に支配され、その後にソ連に組み込まれた。ウクライナのナショナリズムは命脈を保ちながらも、一九九一年の独立以前、この国は「国家」としての存立を固め切れなかった。

ウクライナのナショナリズムが本格的に覚醒するのは二〇一四年前後だ。親欧米派の抗議運動により親露派のヤヌコビッチ政権が崩壊し、ロシアが南部クリミアや東部ドンバス地方への軍事介入に乗り出した。ロシア人とウクライナ人を「同じ民族」とみなしロシアに取り込もうとするプーチン露大統領の思惑とは裏腹に、ウクライナはロシアとの対立を深め、反ロシアをアイデンティティーとするナショナリズムが勃興した。

正当化される「極右」

今年二月に始まったロシアによる侵攻はそうした流れをさらに推し進め、ウクライナは今まさにナショナリズムが形作られるさなかにある。ただ、そこには危険な因子も入り交じる。白人至上主義やネオナチ思想などの過激主義だ。

そもそも一四年に親露派政権を打倒した政変で中心的な役割を果たしたのが、過激な民族主義を唱える極右グループだった。彼らは続く政府軍と親露派によるドンバス地方の内戦でも存在感を示す。当時、オリガルヒ(新興財閥)の資金支援を受けた民兵組織が次々と立ち上がったが、これらは極右グループを母体とするものが多かった。ロシアという強大な敵を前にした極右グループの「活躍」は、その人種差別的な思想や過激主義への懸念を脇に追いやった。

米国の国際人権団体「フリーダムハウス」は一八年の報告書で「極右は愛国心の波に乗り、公共空間における民族主義的で過激なレトリックが正当化されるようになった」「ロシアの侵略を背景とした積極的なPRキャンペーンによって極右は反社会的な青年たちによる特別の集団としてあまり認識されなくなった」と指摘している。元ネオナチ活動家らが警察高官や軍幹部に登用されるなど極右は体制内にも根を張り、警察は極右グループらの不法行為の取り締まりに「容認できないほどの消極的な態度」(同報告書)を取ってきた。

今回の侵攻で存在感を増す戦闘部隊「アゾフ大隊」も、一四年の政変時、極右グループを基盤に発足した組織だ。南東部の要衝マリウポリの製鉄所を拠点にロシア軍と激戦を繰り広げ、「精鋭部隊」として国内外に名をはせた。政変時に結成された民兵組織の多くは解散したり、正規軍に再編されたりしたが、アゾフ大隊は同年十一月に内務省傘下の部隊となり、独立した組織として存続している。

欧米メディアなどから白人至上主義者やネオナチだとして批判を受ける創設者のアンドリー・ビレツキー氏はすでに政治家に転身し、大隊を離れている。アゾフ大隊内では近年、過激派の排除が進んだとも言われる。

しかし、大隊から極右色が消えたわけではない。アゾフ大隊はナチス親衛隊(SS)が使った紋様「ヴォルフスアンゲル」(オオカミのわな)と酷似した紋章を使用し続ける。大隊は公にはネオナチ思想との関連を否定するが、実際は幹部らの間ではいまだにビレツキー氏の人種差別的で暴力的な思想が共有されているとの見方が強い。

アゾフ兵士の親族らに話を聞くと、兵士らの中には「フーリガン(暴力的なサッカーファン)」出身者が多い。フーリガンは欧州各地で極右思想との関わりが指摘され、ウクライナでは特にその傾向が強いとされる。大隊の関連組織が過去にLGBTなど性的少数者や少数民族ロマを擁護する活動家らを襲撃したこともある。アゾフ大隊の関連組織に属するある男性は「大隊には規律がある」と語りながら、「LGBTはウクライナの伝統的な価値観に反する」と断言した。

アゾフ大隊を巡る指摘

侵攻前、欧米諸国はアゾフ大隊の極右傾向に懸念を示していた。米国は一五年、ネオナチ組織とみなし、軍事支援を一時停止。国連人権高等弁務官事務所は一六年の報告書で、アゾフ兵士らが民間人の拷問や略奪に関与していたと報告している。だが現在、西側でアゾフ大隊に対するそうした指摘や批判は少ない。おそらく、大隊とネオナチとの関連性がクローズアップされれば、「ウクライナの非ナチ化」を掲げるプーチン政権にとって格好の口実となるからだろう。

ウクライナにおける極右の政治的影響力は限定的で、国全体がネオナチの影響下にあるように喧伝し、侵略を正当化するロシアの主張は荒唐無稽だ。とはいえ、アゾフ大隊ら民族主義者に潜む過激主義の危険性を矮小化する「ご都合主義」にも違和感を禁じ得ない。

アゾフ大隊を巡っては国外の極右組織とのつながりも指摘される。このため、外国の白人至上主義者らが戦闘経験を得るために大隊の支援に集まるのではないかとの見方もある。欧米からウクライナに供給された武器が欧州の闇市場に横流しされている可能性も懸念され、それらが極右勢力に渡る危険性を警告する声もある。戦争を通じ欧州はウクライナと結束を強め、ウクライナはEU入りを目指す。ただ、そのナショナリズムの行方次第では、この国が欧州にとって新たな対立と混乱の根源と化す恐れもある。

民族主義的な思想そのものは問題ではない。むしろウクライナの戦いぶりは「ナショナリズム」が自国の自由を守るために力強く機能することを示している。ただ、それが排他主義にのみ込まれたときの危うさは戦時下の高揚の中にいる人々には見えづらい。

ウクライナのある街で小洒落たカフェに入ると、「アゾフの英雄」のステッカーが無邪気に飾られていた。

愛国主義は容易に「排他主義」に繋がる(アゾフ大隊の戦闘員たち、キーウ、2020年3月)